



石塚氏の経歴

- 1978 道栄紙業株式会社が設立される
- 1985 全国牛乳パックの再利用を考える連絡会(全国パック連)が発足
- 1988 英国で「The Greenconsumer Guide」が出版される
- 1991 牛乳パック回収指定業者の会が発足
- 1993 第8回牛乳パックの再利用を考える全国大会実行委員会事務局
- 1994 第8回牛乳パックの再利用を考える全国大会が札幌で開催される
- 1995 循環(くるくる)ネットワーク北海道が設立される
- 1997 北海道環境財団評議員
- 1999 「北海道の環境にやさしいお店ガイド「グリーンページ北海道'99」」発行
- 2000 環境省より環境カウンセラーに認定される
- 2003 北海道環境審議会委員
NPO法人環境り・ふれんず代表理事
- 2005 札幌市ごみ減量実践ネットワーク運営委員
北海道地域環境学習講座トレーナー
- 2007 東京で古着の交換イベント「xChange(エクステンジ)」が初めて開催される
- 2008 北海道容器包装の簡素化を進める連絡会事務局
さっぽろファイバーリサイクルネットワーク事務局
- 2009 ECOカフェ「マイカップ」オープン

NPO法人環境り・ふれんずが設立される
指定管理者制度が施行される

10

石塚 祐江さん
道栄紙業株式会社非常勤顧問
環境省認定環境カウンセラー

使い捨て社会から 循環型社会へ

いづか・さちえ 1964年、留萌市生まれ。1985年、道栄紙業入社、2001年より同社非常勤顧問。1997年から北海道環境財団評議員、2005年から札幌市ごみ減量実践ネットワーク運営委員、北海道地域環境学習講座トレーナーなどを歴任。環境省認定環境カウンセラー、NPO法人環境り・ふれんず代表理事。

それは牛乳パック477枚から始まった

みなさんは、牛乳を飲み終わった後の紙パックはどう処分していますか？ 洗って、開いて、乾かして、数がまとまったら近所の学校や店頭の回収ボックスに持ち込んで……と習慣づけている人も多いんじゃないでしょうか。

北海道で初めて本格的に、牛乳パックを回収して再生紙の原料に使い始めたのが製紙メーカーの道栄紙業^[1]です。1987年秋、道栄紙業札幌営業所に、市民のみなさんから持ち込まれた477枚の紙パックが、今では「家庭の習慣、になっている」「牛乳パックリサイクル運動」の最初の一步だったんです。

当時、わたしは入社3年目の事務員でした。その年の5月、会社にこんな電話がかかってきました。旭川の女性からで、「おたくで牛乳パックのリサイクルをやっていませんか？」というお問い合わせでした。たまたまその電話を受けたわたしの第一印象は、「この方は、何を言っているんだろう？」でした(笑)。

ごみ問題とかりサイクルとか、まだ一般的ではなかったころです。でも電話で少しお話をうかがうと、どうも他県ではそういう取り組みが進んでいるらしい。電話の主は神谷さだ子さん^[2]という方で、転勤で熊本から旭川に越してきたばかりだとおっしゃいました。そして「熊本で牛乳パックのリサイクル運動に参加していたので旭川でも続けたいと思っていたのに、北海道には引き受けてくれる製紙会社がひとつもない」とおっしゃるのです。

わたしは、居合わせた上司の小林昌志(現・同社社長)に電話を取り次ぎました。すると小林が神谷さんに「牛乳パックは良質な古紙なので、実は弊社も集めて使いたいと思っていたところです」とお返事をさしあげて、それを聞いていたわたしはちょっと意外だったんですけど(笑)。

じつはすでに「芽」は出ていたんですね。「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会^[3]」という団体が設立され、北海道にも

[1]道栄紙業(株) 1978年設立。本社・倶知安町。

[2]神谷さだ子さん 現・日本チェルノブイリ連帯基金事務局長。

[3]全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 1985年設立。本部・東京。略称は全国パック連。

[4]友の会 1930年、雑誌『婦人之友』読者らが結成。支部組織は全国に約200。

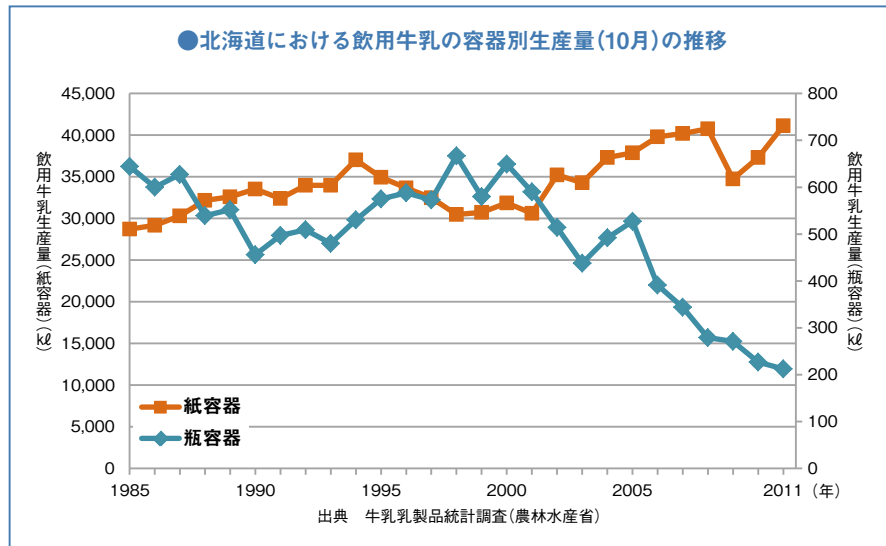
[5]1枚30銭 現在の買い取り価格は1枚40銭。

情報が入ってきていました。道栄紙業でも試験的に回収を試みたことがあったのですが、その時はうまくいかず、中断していたのです。

神谷さんは「市民が牛乳パックを洗って開いて乾かして集めるから、それを回収して再生紙を作ってほしい」と提案されていました。牛乳パックは飲みっぱなしのままでは使えず、洗浄から回収までのコストがネックだと感じていた弊社にとって、渡りに船のご提案でした。

さっそく、神谷さんや「友の会」[4]などの婦人団体、行政の方たちもお誘いして、道栄紙業倶知安工場の見学会を開きました。紙パックが再生紙のトイレトーパーに生まれ変わる工程を見てもらい、意見交換が行なわれました。こうして「各地域で紙パックが5000枚集まったら道栄紙業が回収に向かう」「パックは1枚30銭[5]で道栄紙業が買い取る」という基本ルールができました。

そして数カ月後、最初の477枚が集まったのです。これが『北海道新聞』で報道され、大きな反響を呼びました。会社の電話がひ



っきりなしに鳴り始め、回収運動は全道に広がり始めました。「牛乳パックのリサイクルを通して、暮らしを見直そう」という呼びかけが、道民のみなさんの共感を集めたんだと思います。

全道ネットの仕組みづくり

こういうのもあまり例がないと思うんですけど(笑)、牛乳パックリサイクルを呼びかけるこのチラシ、最初に作ってから26年間、写真を新しいのに差し替えているくらいで、デザインを変えていません。当初のスローガンが現在まで一貫しているから、変える必要がないんです。

[6]ミニコミ紙 ミニコミは和製英語。マスコミ(Mass communication=大量伝達)に対し、少数人に届ける情報メディアの意。



道栄紙業が作成した牛乳パックリサイクルを呼びかけるチラシ

これも偶然ですけど、留萌高校に在学中、わたしは新聞局員として学校新聞作りに参加していました。コンテストでいつも上位入賞するほどのレベルだったんですけど、おかげでミニコミ紙[6]の編集のコツはだいたい分かっていました。それで、市民の

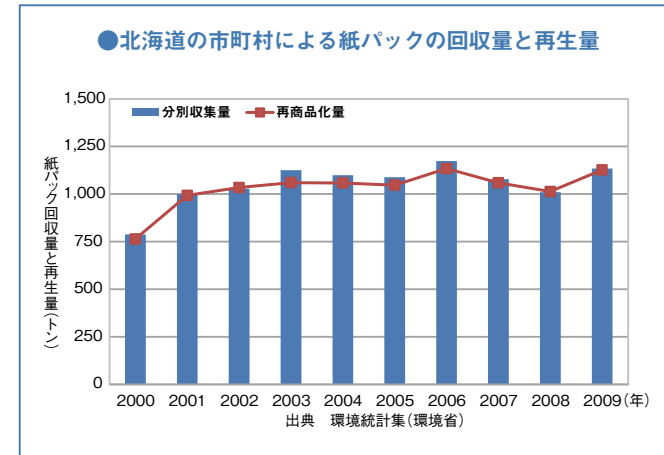
みなさんの熱意に道栄紙業の側からお応えすべく「紙パック通信」を発行してお配りにすることにしました。

回収に協力くださっているみなさんが一番知りたいのは、どのくらい紙パックが集まったか、それにより森林資源がどれほど節約されたか、トイレットペーパーがいくつ再生できたか、といったことでしょうか？ 以降、2カ月に1度の「通信」でそんなデータをずっとご報告し続けました。



石塚さんが発行し続けた「紙パック通信」

「通信」の発行元が道栄紙業ではなく「北海道紙パック会」となっているのにお気づきですか？ 製紙メーカーが前面に出すぎると市民運動が色あせて見えやしないか、と心配する声があったので、社内にこんな任意団体を作って、若いわたしが事務局を任



[7]消費者協会 北海道消費者協会は1961年設立。道内に75の地域消費者協会がある。

[8]生活学校 女性を中心に身近な暮らしの中の問題を学び、生活や地域や社会のあり方を変えていく運動。1964年に提唱され始めた。全国に約1000グループ。

[9]ひがしリサイクルサービス 100ページ参照。

[10]牛乳パック回収指定業者の会 現在は50社が加盟。

されたのです。

運動はどんどん広がっていきました。環境意識の高まりと並んで、先ほど言いましたように道栄紙業が「固定価格買い取り制」をとったことも奏効したと思います。活動グループにすれば、地域での牛乳パック集めが安定した収入源になるからです。「友の会」さん、消費者協会[7]さん、生活学校[8]さん……。小中学校や町内会でも回収が始まり、「コープさっぽろ」の各店舗に回収ボックスが置かれ出すと、隣のスーパーなどもどんどん真似を始めた。

いっぽうプロの資源回収業者さんたちからは、しばらく冷やかな視線を送られるばかりでした(笑)。業界ではまだ「牛乳パックは禁忌品」という意識だったのです。そんななか、札幌では「ひがしリサイクルサービス[9]」の東龍夫さんがいち早く「集団資源回収」の品目に牛乳パックを加えてくださいました。

やがて北海道庁にリサイクル課が新設されるなど、いっそうの追い風が吹きます。道栄紙業はスタッフを道内の資源回収業者さんたちの元へ送って説明を尽くし、賛同くださった32社で「牛乳パック回収指定業者の会[10]」が組織されました。これで、全道をネットワークして紙パックを古紙として回収・集荷するルート

[11]循環(くるくる) ネット
ワーク北海道 1995年設立、事務所・札幌。石塚さんは運営委員。略称はくるくるネット。

[12]グリーンコンシューマー運動 環境に配慮した店や商品を選ぶ消費者運動。英国で出版された『The Greenconsumer Guide』(1988年)が火付け役となり、各国に広まった。

が確立しました。1991年のことです。

「紙パック通信」の発行部数は1000を超えていました。牛乳パックを再利用するメーカーは道内では弊社しかありません。いわば独占ですが、それゆえの責任も負うことになりました。つまり、絶対に途中ではやめられない。市民・マスコミ・行政とじょうずに連携できたのは、北海道ならではのことも知れません。私たちも相手を信頼して取り組んできました。

循環型社会の実現を目指す

こうして回収システムができあがり、立ち後れていた北海道の牛乳パックリサイクル運動は一躍全国トップ級の成果を挙げるまじになりました。すると今度は他県から注目を集めるようになります。1994年、さきほど触れた「全国パック連」の牛乳パックの再利用を考える全国大会が札幌で開かれることになりました。

わたしは大会実行委員会の事務局を引き受けましたが、それまでご一緒してきたみなさんにも協力をお願いし、60団体が実行委員会に加わってくださいました。開催準備にあてた1年あまりの間、毎週のように会合を持ち、「合い言葉は循環(くるくる)」という大会テーマもみんなで考え出しました。このミーティングが、やがて「循環(くるくる)ネットワーク北海道^[11]」という新グループの設立につながります。「循環型社会の実現」を目標に掲げた初めての全道規模の団体です。

グリーンコンシューマー運動^[12]と、その成果としての『北海道の環境にやさしいお店ガイド「グリーンページ北海道99』の自費出版は、「くるくるネット」の実績のひとつです。『イエローページ』の向こうを張って、こちらは環境をキーワードにお店を選んで紹介する買い物ガイドブック。書店に並べてもらうよう頼みに回ったり、新聞にチラシを挟んだり……相変わらず手弁当の草の根運動でしたが、おかげで市民の関心は高まり続け、ネットの会員数は250人(団体会員含む)まで広がりました。

●全国牛乳パックの再利用を考える連絡会全国大会開催状況

	開催年	開催地		参加動員数(人)
第1回	1987	山梨県	大月市	300
第2回	1988	熊本県	熊本市	1500
第3回	1989	大阪府	大阪市	800
第4回	1990	東京都	品川区	1154
第5回	1991	宮城県	仙台市	1287
第6回	1992	福岡県	北九州市	2000
第7回	1993	福井県	福井市	2000
第8回	1994	北海道	札幌市	3000
第9回	1995	愛知県	名古屋市	1100
第10回	1996	神奈川県	横浜市	2200
第11回	1997	島根県	松江市	2000
第12回	1998	兵庫県	神戸市	2500
第13回	1999	東京都	大田区	1300
第14回	2000	石川県	金沢市	1500
第15回	2001	岩手県	盛岡市	900
第16回	2002	岐阜県	関市	1100
第17回	2003	熊本県	水俣市	600
第18回	2004	静岡県	富士市	1300
第19回	2005	大阪府	大阪市	1300
第20回	2006	山梨県	甲府市	1200

※全国大会は第20回を最後に休止

出典 全国牛乳パックの再利用を考える連絡会

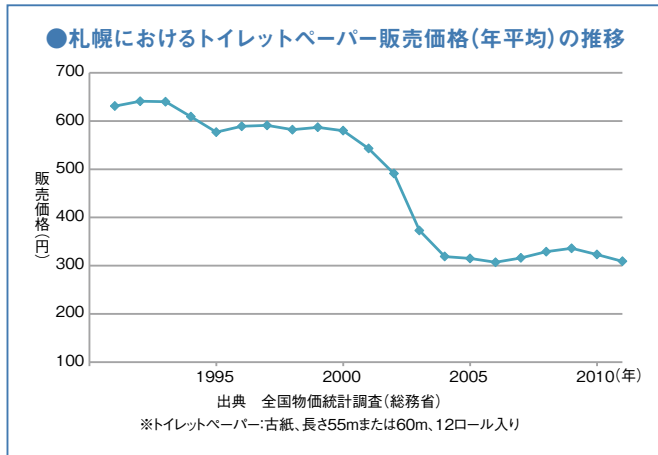
道栄紙業に入社したてのころ、じつはわたしは「腰掛け」のもりだったんですけど(笑)、あの日、偶然あの電話を受けてから人生が大きく変わったと思います。このころになると、わたしは「北海道紙パック会」のほか「くるくるネット」の事務局も引き受け、講演などの依頼もこなすようになって、お給料をもらっているのに道栄紙業の仕事は5割くらい(笑)。道栄紙業としては、社会貢献の延長みたいな感じでわたしに給料を支払ってくれたんだと思います。現在は顧問の肩書きをいただいています。

それはさておき、課題もお話ししておかなくてはなりませんね。それは、集めるほうはうまくいったのに、せっかくの再生品があまり売れていない、ということです。

みなさんはどんなトイレトペーパーを選んで買っていますか? 昔は——と言うとおばさんくさいんですけど(笑)——茶チリ^[13]とか再生紙とかでしかお尻を拭かなかったものです。ところが、とくにバブル景気時代以降かな、ヘンな高級品志向が出

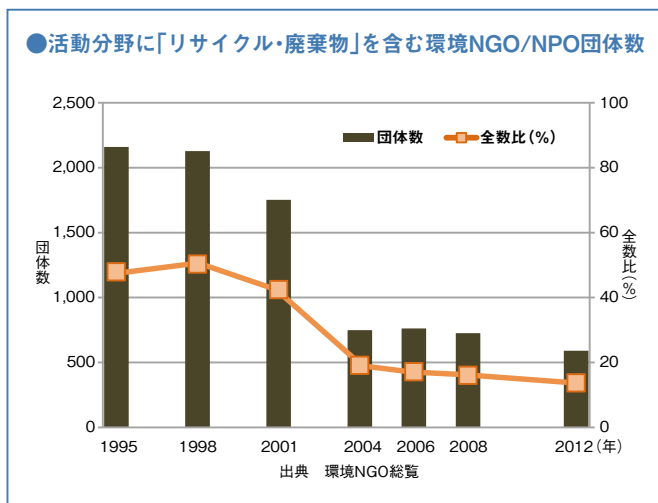
[13]茶チリ 無漂白で茶色をしたちり紙のこと。ちり紙は103ページの注釈参照。

[14]バージンパルプ 古紙パルプに対し、木材（や非木材）から直接作られるパルプをこう呼ぶ。



て、バージンパルプ[14]100%の真っ白な柔らかいトイレトーパーに人気集中してしまっています。円高で輸入パルプの価格が低迷し、バージン製品が安くなったせいもあるでしょう。

回収運動が広がって品質の高い古紙がいくら集まるようになったって、再生品が売れないのでは循環が成り立ちません。いまは地方自治体も資源回収事業を行なっていますが、集めることには熱心でも再生品を使うことは二の次……ということが多い。札幌



市役所などもそうで、集めた古紙を、あっちのほうが高く買い取ってくれるからと、いまは中国などに輸出[15]しているありさまです。

でも、それは違うでしょう？ 長い目で見て、理念がなければリサイクルもごみ減量も続かないと思うんです。同じ自治体でも、たとえば目黒区（東京）などは、地域の古紙から再生したトイレトーパーを、メーカーから全部買い取って、「おかえりロール」という名前で販売しています。これぞ真のリサイクル（循環）の仕組みです。

理念という言葉を使いましたが、わたしは「ごみ減量やリサイクルが目的だ」とは思っていません。それより、自分の暮らしを見直して、子どもたちやそのまた子孫たちのためによい環境を残していくことに、この運動の柱があるのかなって思っています。

「暮らしを見直す場」を広げたい

いま、「xChange（エクステンジ）[16]」という、若い人たちの間ですごく流行っている、おしゃれ着の交換会がありますよね。

洋服の交換バザーみたいなものは昔からありましたけど、「xChange」と呼び変えたら、何だかオシャレな感じがするでしょ。親の世代の古着も「ビンテージ」と呼び変えると価値が上がる気がします（笑）。一点ずつカード（「エピソード・タグ」）が添えてあって、出品者の思い出やメッセージが書いてあるのも面白いアイデアですよ。

こういうところに、モノのリサイクル＝循環を完成させるヒントがあるような気がします。

わたしはいま、「環境り・ふれんず[17]」というNPO法人の代表理事を引き受け、指定管理者制度[18]に基づいて札幌市リサイクルプラザ宮の沢[19]を管理運営しています。若いスタッフが多いので、「xChange」などにも取りかかれるようになってきて、さっき言った「理念」が若い世代にもだんだん広がってきたかなあ、

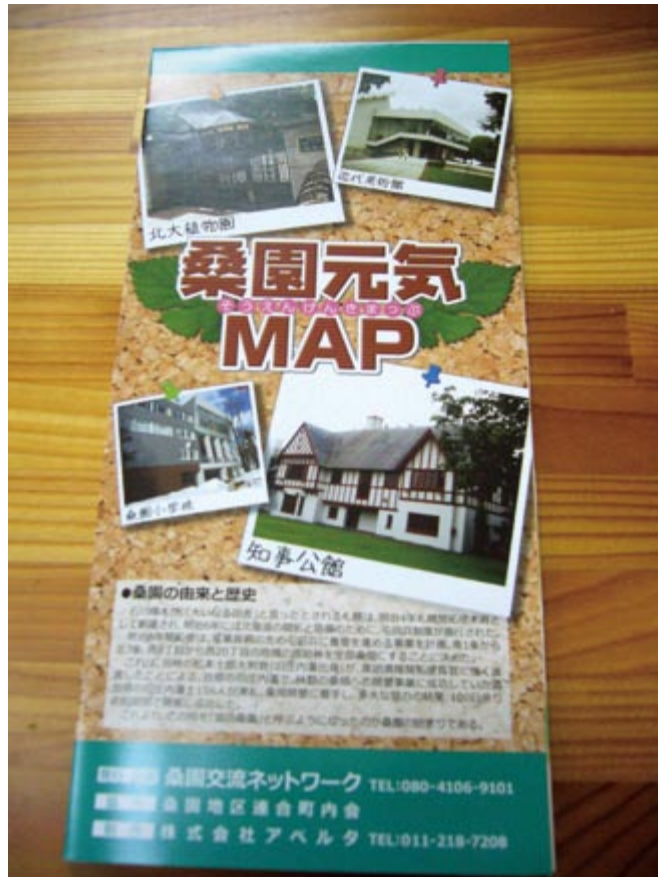
[15]中国などに輸出 109ページ参照。

[16]xChange 環境活動家の丹羽順子氏のプロジェクト。2007年、東京で初開催。

[17]環境り・ふれんず 2003年設立。事務所・札幌市。

[18]指定管理者制度 住民サービスの向上を目指し、公施設に民間事業者のノウハウを活用する制度。2003年に地方自治法に規定。

[19]札幌市リサイクルプラザ宮の沢 ごみ減量とリサイクル意識を啓発する施設。2000年開設。



地元住民の手で作成した「桑園元気マップ」

と思っているところです。

「環境り・ふれんず」は自治体からの受託事業と平行して、自主事業を増やしているところです。JR桑園駅の近くにオープンした「ECOカフェ“マイカップ”」の経営はそのひとつ。テーマはずばり「暮らしの見直しをKIZUKU（気づく・築く）」です。

なにも大それたことを目指しているわけではありません。たとえばこれは、今年作成した「桑園元気マップ」です。桑園地区はマンションがたくさんあって住民も増えているのですが、住民同士の接点がなかなかありません。そこでECOカフェのお客さん

たちや町内会などに声をかけて、「桑園交流ネットワーク」を作り、2010年に「ミニ大通りお散歩まつり」というイベントを始めました。そうして作ったのがこのマップ。10年後、私たちはどんな街に住んでいたいのか、どんな街であって欲しいのか、ワークショップで夢を出し合っ、地図に書き込みました。「生ごみを地域の中でリサイクル」「その堆肥で花壇作り」「いざというときに互いに助け合えるネットワークを」といったふうにアイデアをつなげていく、ECOカフェをそんなことができる場にしていきたいのです。

桑園エリアだけでなく、こんな活動拠点が札幌市内各所にたくさんできたらいいなと思います。「環境り・ふれんず」が作らなくても、桑園のECOカフェをモデルに、それぞれの地域にお住まいのみなさんが、近くの街角に気軽に集まれる「お茶の間」的な場をおつくりになれば、案外すぐにあちこちに生まれてくるんじゃないでしょうか。

民意というのかな、市民だって世の中を動かせるということを、わたしは牛乳パック回収運動でとことん経験しました。ただしそれには、役所に要望するとかではなく、市民自身が動いて流れを作るやりかたが効果的です。私たちが変われば、世の中は変わるんです。

(2012年5月16日取材)